

寄居町に住んでいるけれど、町の良さって忘れがち。町の本当の姿って意外と知らない。寄居町。町内からの「声」

特集
町を知る・聴く・考える

Side.A 町の声

1000人目の声

— 選ばれる町となるには —



私はいま、96歳。
寄居町に生まれて
本当によかった。

知

昭和・平成・令和
寄居町の
確かな足跡



【寄居町合併70周年
記念誌（町HP）】



聴

そうまかずこ
相馬和子さん（西部）

寄居に生まれ、育ち、以来ずっと寄居町民の96歳。寄居町は山や川に恵まれていて、この町に生まれて本当に良かったと思う。最近、デイサービスにお世話になっていますが、新しい友達もできて、楽しいですよ。若い人も皆、誰もが年をとります。年をとっても楽しく暮らせるような福祉施設をもっと作ってほしいですね。

取材議員の
視点 生まれた町で長寿という幸せ

「毎日笑うことが物忘れ防止」と相馬さん。生まれた町で、健康で長生き。もしかすると、これは最高の幸せかもしれない。相馬さんの深く優しい笑顔が物語る。

考



10年後、20年後、
30年後の私？
—— 寄居にはたぶん
住んでいないと思う。

知

地元が好きなのは理由は何ですか？

育った地だから

57.9%



（株）明治安田総合研究所 経済調査部
47都道府県対象「地元愛に関するアンケート調査」（2024）より
回答数：4785

聴

さえきゆみ
佐伯友美さん（西部）

横浜生まれ。36年前に寄居町に転入。

昔は子どもも多く商店街も活気がありましたが、最近は色々な場面で活気がなく残念。当時は町になじむのにも男性社会の色が濃く、女性は特に苦勞したけれど、今は外からの人に対して皆、協力的になったと感じる。ただ「昔はこうだった」を基準にしてはだめ。今の時代に合った感覚、やり方に変えていくことが大切です。

取材議員の
視点 「変わっていく町」にも深い「地元愛」

「町のために、出来ることは精一杯やってきた」と佐伯さん。溢れる「地元愛」があってこそ。町の変化を前向きに受け止めることが第一歩。

考

「昔はこうだった」
これはだめ。
今の時代に合った
感覚が大切。



聴

ヘルナンデス・エイジアさん（市街地）

ハワイ生まれ。3歳～寄居町在住。

寄居町は自分のルーツにコネク特できる感覚が持てる場所。ふるさと寄居町の風景やホッとする空気感が好き。それでも住む場所は、ライフスタイルの変化に合わせて、自分にとって居心地のいい「その時々自分の居場所」を見つけたい。

取材議員の
視点 「好き」でも住まない選択

これからも寄居に住んでいるかとの問いに、少し考えてから爽やかに「ノー」との答え。寄居は好きだけれど、住む場所には選ばない。これもひとつの選択肢だ。

考

3月定例会での予算質疑で峯岸町長が答えた「若い人に寄居に住んでももらい、寄居町が選ばれる町となることが重要」との思い。これは議会も同じだ。議会だよりで議員による町民取材を始めたのが平成27（2015）年。この11年間、町のリアルな声を掲載してきた。1000人目の町民登場となる今号では、寄居町議会だよりの真骨頂、「ダブル表紙による特集&町民取材」で、この町のゆくえを探る。こちらオモテ表紙からは、寄居町の今を知る「町内からの声」を総力取材。ウラ表紙からは「町外の声」を掲載した。ぜひ、あわせて読んでいただきたい。